

## 日々の授業づくりが充実する校内研究の推進

—気軽に授業を見合い実践できる環境づくりと実践発表会を取り入れた校内研修を通して—

亘理町立荒浜小学校 菊地 健太

### 1 主題設定の理由

#### (1) 今日の教育課題より

『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について(答申)<sup>1)</sup>では、『令和の日本型学校教育』を担う教師の学び<sup>2)</sup>について示されている。その中で、社会環境や教育を取り巻く諸条件が変化する中で、子供の多様な学び方を見守り、よりよい授業を行うためには、教師自身が学び続け、教育の専門家としての資質能力を高め続ける必要があると指摘されている。さらに、教師は子供たちにとって身近な存在の一人であり、主体的に学び続ける教師の姿は、子供にとって重要なロールモデルであると示されている。

#### (2) 本校校内研究の体制

これまでの本校の校内研究の軸は研究授業であり、授業の成果や課題を共有して児童の学力向上につながる授業改善に努めてきた。しかし、年数回の研究授業だけでは、授業づくりについて教員間で共有する機会が少なく、研究の日常化を図ることができなかった。

#### (3) 本校教員の実態

本校教員の構成は、教職経験年数の浅い教員と豊富な教員の二極化が見られる。年度始めに実施した意識調査の結果から、国語科の「書くこと」については、経験年数の浅い教員を中心に半数以上の教員が学習指導に自信がないことが分かった。また、経験年数の豊富な教員の多くがICT機器の活用に不安を感じていることも明らかとなった。教員の授業力向上を図り、日々の授業の質的向上につなげるためには、得手不得手を補い合える体制の構築と、個々のスキルアップを図る校内研修の充実を図る必要があると考える。

以上のことから、教員同士が積極的に関わり合いながら授業改善を行い、児童の学力向上につなげられるような校内研究の推進を図りたいと考え、本研究主題を設定した。

### 2 研究の目的と方法

#### (1) 研究の目的

日々の授業づくりが充実する校内研究の推進には、年間を通して、授業づくりについての教員同士の学び合いの場が必要であると考え。「授業づくりが充実する」とは、日々の学習指導や校内研究、校内外

の研修で得た学びを基に授業改善をしていくこと、授業づくりについての教員間の活発な話し合いがなされることである。そのための手立てとして、気軽に授業を見合い実践できる環境づくりと、実践発表会を取り入れた校内研修の充実を図り、それらの有効性を検証していく。

#### (2) 研究の手立て

##### ① 気軽に授業を見合い実践できる環境づくり

##### ア 校内研究の手立てを取り入れた提案授業

本校校内研究は、カードや付箋、シンキングツールを手立てとして用いながら「書くこと」の指導の在り方を探ることを目的としている。しかし、その具体的な手立てについて本校教員がイメージを持っていない様子が見られる。そのため、実践Ⅰを校内研究における1回目の研究授業として位置付けることで、本校教員に校内研究の手立ての具体を伝える。

##### イ 授業参観の工夫

本校では、1年間で一人1回の研究授業を行うため、共通の学習指導略案の様式を示すことで、研究授業における授業者の学習指導略案作成時の負担軽減を図る。また、参観時の共通の視点を定め、学習指導略案冒頭に明記することで、参観者が視点を絞って授業を参観できるようにするとともに、研究授業後の検討会(以下「事後検討会」)の話し合いの視点としても活用していく。これらに加え、「ミニ参観」の実施も計画する。「ミニ参観」とは、参観する視点を基に授業の一部を見合う活動である。校内研究に沿った授業を行う中で、教員同士の積極的な交流を促し、学習指導と実践意欲の向上を図る。

##### ② 実践発表会を取り入れた校内研修の充実

##### ア 実践発表会の実施

「実践発表会」とは、校内研究に沿った授業実践を学級担任が発表し、その有効性や課題等を共有する場である。発表から、校内研究を意識した授業づくりの手掛かりを見付け、個々の学習指導に生かせるようにしていく。複数回の実施を計画し、3回目の実践発表会を実践Ⅱとして位置付け、校内研究を推進する上での有効性を更に検証するとともに、今後の実践発表会の進め方について改善を図る。

##### イ 教員の实態に応じた校内研修の展開

校内研究の推進を踏まえ、ICT機器操作やシンキングツールを指導に取り入れていくための研修を展開し、個々の指導力向上を図る。

##### (3) 研究の検証方法

研究の手立ての有効性を、以下の方法で検証する。

- ・ミニ参観や実践発表会における記録及び事後のアンケートの記述内容を分析する。
- ・年2回の意識調査の結果から、校内研究の取組についての変容を見取る。

### 3 実践Ⅰの取組(授業実践)

単元名：山場のある物語を書こう  
(東京書籍 新編新しい国語四上)

#### (1) 手立てについて

##### ① 気軽に授業を見合い実践できる環境づくり ア 校内研究の手立てを取り入れた提案授業

シンキングツールの中で物語の概略をつかむことに適しているプロット図を活用し、前時までに考えた出来事メモを整理したり、物語の山場を捉えたりできるようにした。学習指導略案には手立てを講じる場面とその理由を明記した。

#### イ 授業参観の工夫

学習指導略案の冒頭に研究授業を参観する際の3つの視点を明記し、参観者が視点を絞って授業を参観できるようにした(図1)。この視点を基に、事後検討会を実施した。

#### 《荒浜小学校校内研究 研究授業を参観する際の視点》

- 児童はねらいを達成できたか
- 校内研究の視点に沿った手立て(カードや付箋・シンキングツール)の有効性
- 今後の授業実践に生かせる内容であったか

図1 参観する際の3つの視点

#### (2) 実践Ⅰの成果と課題(○：成果 ●：課題)

##### ① 気軽に授業を見合い実践できる環境づくり ア 校内研究の手立てを取り入れた提案授業

○ どのような手立てをどの場面でどのように講じていけばよいか、本校教員にイメージを持たせることができた。参考として、本時はオンライン授業支援ソフトのプロット図を使用した(図2)。物語の山場を視覚的に捉えながら物語の構成を考えたり、プロット図に書き出した考えを整理したりする際、有効に働いた。

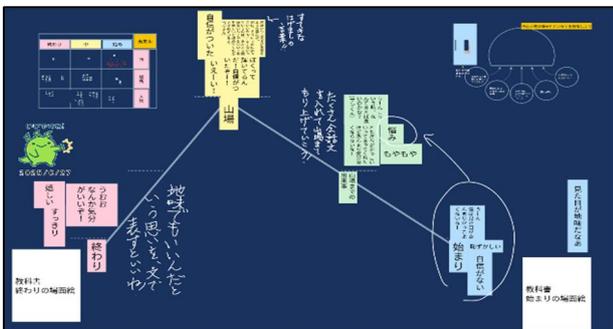


図2 山場のある物語の「組み立てメモ」(実践Ⅰ)

- 本時で使用したシンキングツールは、低学年には難しいとの意見が挙がった。その学年の学習のねらいを達成するために、カードや付箋など実際に書き込んだり手で動かしたりできるような、発達段階に応じた手立てを考えていく必要がある。

#### イ 授業参観の工夫

- 手立てを講じる場面や参観時の視点を示したことで、視点に沿って授業者の働き掛けや児童の様子を見ることができたとの声が多く挙がった。
- 略案があったことで、書く内容や分量の見通しを持たせることができた。
- 参観する際の視点「今後の授業実践に生かせる内容であったか」は、生かせることができるかどうかの二択を問う形となり、具体的に欠けるものであった。「今後の授業実践に生かせる内容は何だったか」の視点で見ること、より具体的な内容を考えながら参観したり事後検討会で話し合ったりできると考えられる。

### 4 実践Ⅱの取組(校内研修)

#### (1) 実践発表会の内容

##### ① 発表内容

- ・校内研究の手立てを講じた授業や、その後の活動等について一人1～3分程度で発表する。
- ・「手立てと講じる目的」「結果」「児童の様子」を必ず伝え、その他「具体の指導」「成果物」「身に付いた力」「教師の気付き」等を発表する。
- ・校内研究の手立てを用いている場であれば、国語科に限定せずどの場面でもよい。
- ・ミニ参観での学びや気付き等についてでもよい。
- ・発表後、参加者からの質問に答える時間をとる。

##### ② 発表方法(以下のいずれかを選択または組み合わせ発表)

- ・口頭発表 ・紙面発表 ・動画による発表
- ・児童の作品を用いた発表 ・その他

#### (2) 実践発表会の経過

##### ① 第1回実践発表会

###### ア 概要

研究主任による授業実践の発表を通して、実践発表会の進め方を示すことを目的として実施した。

#### イ 成果と課題(○：成果 ●：課題)

- 実践発表会の内容と発表方法について、本校教員にイメージを持たせることができた。
- 授業実践Ⅰ後の指導と児童の様子等について1単位時間では見取ることができない児童の変容や成果物について共有することができた。
- 実践発表会を通して、他教員の学習指導から学ぶことができそうという肯定的な意見が寄せられた。
- 実践発表会の説明に時間を費やしたため、予定より長い発表となってしまった。本来は全担任が実践発表を行うため、会の時間配分を具体的に考える必要がある。
- 話し合いには不向きな座席配置であった。
- 発表人数が複数になった場合の実践発表会のイメージがしきれていない。

② 第2回実践発表会

ア 概要

発表人数が複数になった場合の実践発表会の進め方について、本校教員にイメージを持たせることを目的として実施した。

イ 成果と課題(○：成果 ●：課題)

- 発表人数が複数になった場合の実践発表会のイメージを持たせることができた。
- 他学年が授業で実践した手立ての有効性や課題を話し合う場にする事ができた(図3)。
- 話し合いでは、何を話せばよいか分からず沈黙する時間があった。大まかな発表内容を紙面にまとめて配布する、話し合いの視点を明確にするなどして話し合わせる必要がある。
- 教員によって発言量や発言時間に大きな差があった。教員の実態を考慮した座席を工夫する、隣同士で話し合わせてから全体の話し合いに進むなどして、発言しやすい場を整える必要がある。



図3 第2回実践発表会

③ 第3回実践発表会(実践Ⅱ)

研修をよりよいものにするために、これまでの実践発表会の経過を踏まえ、以下の手立てを講じた。

ア 事前準備

(7) 発表者との共有

発表内容と発表時間の目安等を把握し、滞りなく研修を進めるために、発表内容と方法について発表者と事前に共有した。

(4) 研修シートの作成

見通しを持って参加できるように、研修の流れと発表内容を1枚の研修シートにまとめ、事前に配布した(研修計画案参照)。

イ 発表当日

(7) 発表項目と話し合いの視点の明確化

研修始めに、必ず発表する項目と話し合いの視点を確認して明確にした(図4)。必ず発表する項目が抜けていた際は、研究主任が発表者に問い掛けて確認してから話し合いに移った。

<p>○必ず発表する項目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講じた手立てとその目的</li> <li>・ 結果(成果や課題)</li> <li>・ 児童の様子</li> </ul> <p>○話し合いの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手立ての有効性</li> <li>・ 自分だったら授業をどう展開するか(改善案) など</li> </ul>
--

図4 発表項目と話し合いの視点

(4) 座席配置と話し合いの形態の工夫

教職経験が豊富な教員と浅い教員が隣同士になる

ように座席を配置した。また、発達段階に即した指導法についての話し合いができるように、なるべく学年部で組めるようにした(図5)。

		電子モニター			
低学年若手				高学年ベテラン	
低学年ベテラン				高学年若手	
教頭				中学年若手	
中学年若手				中学年ベテラン	
		中学年若手	校長		

図5 教職経験と学年部を考慮した座席配置

ウ 研修後

(7) 事後アンケートの実施

実践発表会に参加しての学びや進め方等、今後の改善につなげるための事後アンケートを実施した。

(4) 研修ログの蓄積

実践発表会で使った資料や記録は、実践共有ファイルに綴ったり、データ化して校内研究フォルダに保存したりして、いつでも閲覧できるようにした。

④ 実践Ⅱの成果と課題(○：成果 ●：課題)

- 発表内容と方法について発表者と事前に共有したことで心の余裕ができ、参加者から意見を吸い上げながら話し合いをコーディネートすることができた。
- 研修シートの発表内容下段に余白を設けたことで、授業づくりにつながる学びを書き込みながら研修に参加する姿が見られた。
- 話し合うペアを学年部で設定したことで、発達段階を考慮した話し合いがなされた。自分たちの学年部で手立てを講じたらどのような授業展開になるか、児童はどんな反応をするか等、自分の事として意見を出し合う姿が見られた。また、今回は話し合いの視点を基に学年部で意見交流したことを全体で共有し、特筆すべき話題について全体場で取り上げた。前回よりも教職経験の浅い職員も積極的に質問や感想を伝える姿が見られ、教員による発言量や発言時間の差が少なくなった。
- 上記のような場の工夫は、一人一人の発言の機会を保障し交流しやすい雰囲気醸成につながった一方で、発表を含め一人当たり10分という時間設定のため、感想や質問にとどまった。授業づくりの手掛かりを見付けるといった研修目的を念頭に入れた上で、多くの意見をもらう場とするか、一つの話題について議論し深めていくものにするか等、発表内容や発表者の意向を考慮した会のコーディネートを考える余地がある。
- 今回の発表内容の中には、口頭やモニターに映しての説明では伝わらないものもあった。授業の様子を動画に撮っての発表を促したり、教員同士声を掛け合いながら実践を見合ったりできる機会を持てるような環境づくりを更に推進していく必要があると感じた。

## 5 研究の検証と考察

### (1) 教員を対象とした意識調査の結果から

#### ① 気軽に授業を見合い実践できる環境づくり

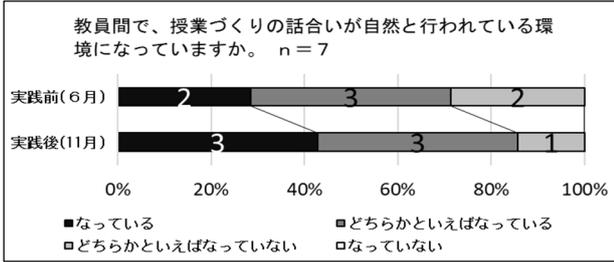


図6 意識調査の結果

意識調査の結果、「教員間で授業づくりの話合いが自然と行われている環境になっているか」という問いに対し、肯定的に答えた教員は1名増えた(図6)。

記述を見ると、「研究授業の視点が参観後の話合いの観点になった」「実践発表会で発表から実践につなげている」等の記述が多く見られた。しかし、以前よりも授業づくりの話合いは増えたが、自発的に行われている環境としては不十分との回答も挙がった。

#### ② 実践発表会を取り入れた校内研修の充実

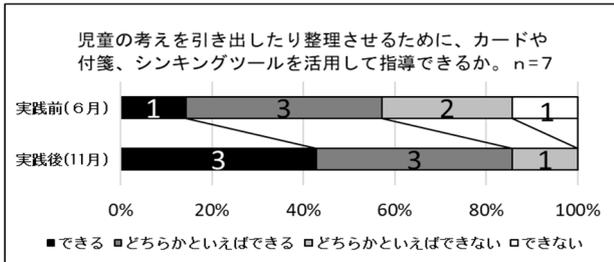


図7 意識調査の結果

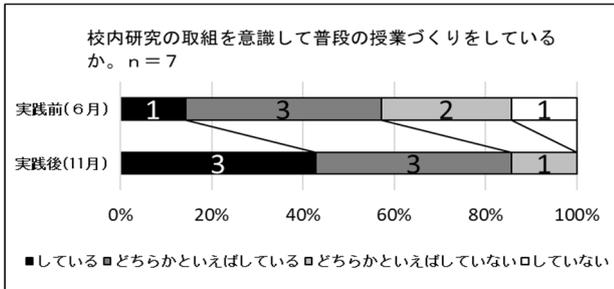


図8 意識調査の結果

「児童の考えを引き出ししたり整理させたりするために、カードや付箋、シンキングツールを使って指導できるか」という問いに対し、肯定的に答えた教員は実践後2名に増えた(図7)。また、「校内研究の取組を意識して普段の授業づくりをしているか」の問いについても、肯定的に答えた教員の数が増えた(図8)。シンキングツール等の効果的な使い方が分からない職員が多い実態を踏まえた外部研修を実施したこと、実践発表会を取り入れたことで、昨年度よりも教員同士で学び合う機会が増え、学習指導に自信が持てない教員の実践に対する敷居が低くなったことが要因の一つとして考える。表1は、実践発表会について調査して得られた回答である。

表1 アンケート調査記述内容(一部抜粋)

<b>実践発表会に参加して見つけた授業づくり</b>
・理科の発表が、他教科で考えを整理する際のヒントになった。 ・5年生の実践が参考になった。3年生でも使えるようなツールを使用して考えを整理させたいと思った。 ・様々なツールの中から学習の目的に合ったものを選ばせる実践が、自分の学級でもできると思った。
<b>実践発表をした(聞いた)感想</b>
・日々の実践を見直す機会になった。 ・先生方から勉強することが毎月できて勉強になった。発表も負担が少なくなってきた。
<b>実践発表会の運営についての意見</b>
・実施の頻度や時間はちょうどよかった。 ・発言しやすい雰囲気の中で意見交流ができた。 ・近隣での話合いは、手短かに話し合えば結論も早く出るが、議論が深まるかどうかは別。目的に合わせた様々な話合いがあってよいと思う。 ・実践を見合う、動画に撮る等すると更に実感がわく。 ・多忙な時期を避けて計画してほしい。

### (2) 研究の成果と課題

意識調査の結果や教員の校内研究への取組から、気軽に授業を見合い実践できる環境づくりと実践発表会を取り入れた校内研修の充実は、教員同士が積極的に関わり合いながら授業改善を行い、児童の学力向上につなげる手立てとして有効だったと考える。

全員が同じ方向で校内研究に取り組むためには、研究の目的とその達成に向けどのような手立てを講じて授業改善を行っていくかといった共通理解が重要である。校内研究の手立てを取り入れた提案授業は、教員に今後の実践の見通しを持たせ、取り組みやすい環境を作ることにつながった。また、参観に当たり共通の視点を設けることは、参観の質の高まりと検討会での話合いの深まりにつながった。さらに、実践発表会の継続的な実施が、普段の授業づくりについての教員同士の学び合いを促し、得た学びを参考に実践する姿につながった。

一方で、実践を聞き合うだけでなく、見合う機会があると更に授業づくりが充実すると考える声も挙がった。手立てとして「ミニ参観」を計画し、実施方法を全教員で共有したが、校内事情により実施できなかった。

今後は、校内研修等の回数や時期についての無理のない計画と早めの周知に加え、計画中の「ミニ参観」の充実を図ることで教員同士の積極的な交流を促し、研究の日常化につながる取組を進め、日々の授業づくりが充実する校内研究を推進していきたい。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省(2022)『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について(答申)』

#### 【図表等の許諾について】

図2は、実践Iの中で児童が作成したものである。図3は、第2回実践発表会の様子である。図6、7、8及び、表1は教員を対象としたアンケートの結果である。研究の目的にのみ使用することとし、児童の保護者及び所属校の校長から使用許諾を得た。